

# 日本語学習者における授受表現の誤用研究

## —— 英語圏学習者を中心に ——

内 藤 春 菜

### 1. はじめに

日本語の授受行為を示す表現として「あげる」「もらう」「くれる」がある。これらの表現を一般的に授受表現、あるいはやりもらい表現と呼ぶが、物の授受に留まらず、補助動詞として行為の授受に用いる表現も含まれる。また、これらの授受表現に敬語表現が組み合わせられると、より複雑になっていく。授受表現には、まず授受の方向が意味として含まれているが、寺村（1982）が指摘するように、日本語の授受表現の場合は、「誰が誰に対して（誰から誰へ）」物や行為の効果が移動するののかという制約も持つ。つまり、「与える人が誰で、受けとる人が誰かということについての特別な条件」があると述べる。

日本語学習者が使用する教科書の多くは、比較的初級段階で授受表現が導入されており、その使用頻度の高さや習得の重要性も伺える。しかしながら、先述した日本語の授受表現の持つ複雑性から、日本語学習者にとっては習得が非常に難しく、誤用の多い学習項目の一つでもある。本研究は、日本語学習者の授受表現に関する誤用傾向を分析し、日本語教育の中でも重要な学習項目の一つである授受表現の確実な習得に繋がる学習・指導のヒントを探るものである。

### 2. 先行研究

日本語学習者における授受表現習得の困難さや誤用、無使用については、先の研究でも多く指摘されてきた。

荒巻（2003）は、授受文形成能力（授受表現を使用して文法的に正しい文を構成・形成する能力）と場面判断能力（場面に応じて授受表現を使用すべきかどうか適切に判断する能力）の二つの能力の相関に着目して誤用との関

係性を検証し、学習者の場面判断能力の不足が誤用の要因の一つになっていることを指摘した。

また、尹（2006）は、韓国人学習者に授受補助動詞を使用した文産出テストを実施し、日本語能力、及び学習環境による習得の影響を分析している。これによると、受益動詞の習得はJSL・JFL<sup>(註)</sup> 両環境とも能力の上昇と共に進むとし、「てあげる」の習得は学習環境の影響が見られ、「てくれる」「てもらう」はJFL学習者の場合、日本語能力によって選択傾向が異なるとされている。

授受表現習得に関する諸論文を概観し、授受表現指導の妥当性を検証している稲熊（2006）によると、最近の研究の動向から本動詞の場合は、「あげる」→「もらう」→「くれる」の順に困難になり、補助動詞的用法では「～てあげる」→「～てくれる」→「～てもらう」であると言われている。このように、授受表現に係る研究は多岐にわたり、様々な誤用の要因、習得順序や難易度に関する指摘がされてきたが、どの結果も一概には言えないことが課題となっている。

本研究で対象とする英語圏学習者における研究では、萩原（2007）が米国中西部の大学で第二言語として日本語を履修する学習者を対象に聞き取りによる文法性判断テストを実施した。このテストから萩原は、日本語の履修年数にかかわらず、授受補助動詞の中では「てあげる」「てくれる」「てもらう」の順に文法性判断が下がるとしている。これは、稲熊（2006）と同様の結果を示している。

更に、坂本・岡田（1996）が授受本動詞と授受補助動詞混合の空欄補充テストを実施した結果、英語話者は他の中国語・ベトナム語等話者よりも、初級終了レベル・上級レベル共に正答率が低いことが明らかになり、誤用の分析結果から英語話者の誤用の型は非常に多様性があると指摘している。また、出題形式の観点から、会話文の関係節内で誤用が最も多く現れ、複雑な文構造や関係節と修飾される名詞との関係の適切な理解がなければ授受動詞の使用は難しいと述べている。このことから英語話者に対する理解と、日本語授受表現の適切な指導が必要であることが伺える。

山田（2004）は、日本語授受表現はヤル、クレル、モラウのように三項対立として存在するが、諸言語の多くは、英語のgiveとreceiveのように与え手側・受け手側の立場で表現する二項対立で現れていると述べる。また授

受補助動詞については、英語などの言語はgiveやreceiveに相当する動詞を補助動詞として用いる方略を持たず、恩恵的行為の表示はもっぱら前置詞などによって受益者の述語との関係を表すとしている。その上で、方向性融合型give（あげる） > receive（もらう） > 方向性弁別型give（くれる）の順に習得を考えるのが妥当であり、この方向性弁別型giveを物の授受にも行為の授受にも用いる日本語は、類型論的に見て極めて特異な言語であると述べている。

この山田（2004）の指摘から、日本語と英語には授受表現に大きなズレを持つことがわかる。また、稲熊（2006）や萩原（2007）の授受補助動詞の結果とは一致しないこともわかる。

以上のことから、授受表現は多くの学習者が習得に困難を感じ、先行研究も多く行われてきた一方で、その要因、難易度が未だ明確になっておらず、課題も多くあることが伺える。中でも英語話者は日本語との授受表現のズレから、他言語話者に比較して困難であり習得が遅れる傾向が見受けられる。このことから本研究では、坂本・岡田（1996）が指摘した出題形式の違いによる誤用への影響や、山田（2004）が指摘する日本語と英語の授受表現のズレに着目すると共に、新たに、英語話者における授受表現に対する意識調査を行い、再度、英語話者における授受表現の誤用傾向を分析したい。

### 3. 本研究の目的

上記を踏まえた上で、本研究では坂本・岡田（1996）が他言語話者より習得できていないことを明らかにした英語話者を対象に、

- (1) 会話文・文章文、単文中の授受表現・複文の関係節中の授受表現、本動詞・補助動詞、「あげる」・「もらう」・「くれる」それぞれで誤用に一定の傾向が見られるか。また、日本滞在歴、日本語学習歴、日本語学習機関による傾向が見られるか。
- (2) 英語の表現と日本語の表現とにどのような相違が見られるか。
- (3) 学習者が授受表現に対してどのような意識を持っているか。

について明らかにするため、空欄補充形式のテスト調査（以下、「授受表現確認テスト」とする）を行い、学習者の授受表現に関する誤用傾向を分析する。また、インタビューまたはアンケートを通して意識調査を行い、授受表

現やその学習に対して学習者がどのように感じているかも併せて考察し、学習者が授受表現を学ぶ際の学習法・指導法のヒントを得ることを目指す。

## 4. 調査

### 4-1. 調査方法

調査は大きく分けて2種類行った。

1つは研究目的（1）の授受表現の習得状況と誤用傾向を調べるための、授受表現確認テストである。行為の与え手・行為の受け手・授受の対象物・授受の方向等、授受行為の状況を示すイラストと、それに関する会話及び文章を提示し、空欄に当てはまる日本語を記述させた。イラストを提示することで、文脈や語句の理解を補い、調査協力者の日本語能力に関わらず解答しやすいようにした。記述の際には、必ず「あげる」「もらう」「くれる」のいずれかの表現を用い、適宜動詞の形を変えて記述するよう指示した。どうしてもわからない問題については無答を可としている。作成した問題は、日本語母語話者3名に空欄補充部分を記述してもらい、作成者の意図した答えが得られることを確認した。また、この授受表現確認テストにおいては、同時に研究目的（2）の日本語と英語の授受表現の相違も調べるために、テストの各問題中の授受表現を含む文を英語に書き換えてもらった。

もう1つは、研究目的（3）の学習者の授受表現に対する意識を調べるためのアンケート及びインタビューによる意識調査である。この調査は授受表現確認テストを受けたすべての調査協力者に実施した。ただし、調査協力者の都合上、3名はアンケートのみの回答で、インタビューを行っていない。この調査では、授受表現に対する苦手意識、授受表現の日英差に対する考え、学習方法等の意識を調査した。また、調査協力者に応じて授受表現確認テストにおける難易の度合いや解答の理由も尋ねた。

調査は2015年9月中旬から10月上旬の間に、各調査協力者の都合に合わせて日時や会場を設定し、実施した。調査時間はあらかじめ決めていなかったが、授受表現確認テストの回答時間は、どの調査協力者もおおむね40分程度であった。その後、15分程度の意識調査を行った。

## 4-2. 調査協力者

調査協力者は、秋田県秋田市内並びに宮城県仙台市内在住の外国人留学生と外国語指導助手（以下、「ALT」とする）、9名である。全員英語圏出身者で、英語を母語としている。調査協力者の出身地の内訳は、アメリカ合衆国5名、イングランド1名、ニュージーランド1名、南アフリカ1名、トリニダード・トバゴ共和国1名である。男女比は男性3名、女性6名で、年齢は25～31歳（平均年齢27.4歳）である。日本語能力レベルは多様であるが、日本滞在歴、日本語学習歴、日本語学習機関が様々であるため、本研究においてレベル分けは行わないものとする。

## 5. 授受表現確認テスト

### 5-1. 授受表現確認テストの内容

授受表現確認テストの問題作成に当たっては、坂本・岡田（1996）の調査方法を参考にし、それを基に改良を加え実施した。本動詞「あげる」「もらう」「くれる」と補助動詞「～てあげる」「～てもらう」「～てくれる」の6通りを、短い会話文中の単文の中で使うもの、同じく会話文中の複文の中で使うもの、通常の文章文中の単文の中で使うもの、同じく文章文中の複文の中で使うものの4種とそれぞれ組み合わせた（表1）。各組み合わせの問題を1問ずつ作成し、計24問出題した。問題は全てランダムに配置して実施した（表2）。

単文の問題は、単文中の述部を空欄にし、授受表現を記述させた。複文の問題においては、関係節を持つ複文の関係節中に空欄を設定した。また、坂本・岡田（1996）においては計15問出題しているが、本研究では、「文章文中の単文の中で使うもの（補助動詞各3問）」「文章文中の複文の中で使うもの（本動詞各3問）」「文章文中の複文の中で使うもの（補助動詞各3問）」の計9問を新たに追加している。

〈表1〉 出題問題の組み合わせ形式

会話文	—	単文	—	本動詞	—	あげる	} *
						— もらう	
						— くれる	
会話文	—	単文	—	補助動詞	—	*	
会話文	—	複文	—	本動詞	—	*	
会話文	—	複文	—	補助動詞	—	*	
文章文	—	単文	—	本動詞	—	*	
文章文	—	単文	—	補助動詞	—	*	
文章文	—	複文	—	本動詞	—	*	
文章文	—	複文	—	補助動詞	—	*	

〈表2〉 出題問題の配当番号

		本 動 詞			補 助 動 詞		
		あげる	もらう	くれる	あげる	もらう	くれる
会 話	単 文	(7)	(12)	(2)	(19)	(16)	(6)
	複 文	(1)	(21)	(15)	(23)	(5)	(8)
文 章	単 文	(13)	(3)	(24)	(11)	(9)	(20)
	複 文	(14)	(4)	(22)	(10)	(18)	(17)

なお、本授受表現確認テストにおける正答・誤答の判断は、「あげる」「もらう」「くれる」を提示された場面に応じて適切に選択できているかを基準とする。よって、時制の表現に関する誤用や補助動詞として使用すべき箇所での本動詞としての使用、目的語の欠落や助詞の誤用、表記の誤りは、本テストにおいては誤答とみなさないこととする。

更に、各問題の授受表現を含む文に下線を引き、その部分について英語に書き換える欄を問題ごとに設けた。ただし、日本語の授受表現自体は空欄、あるいは各調査協力者の解答であるため、授受行為を示すイラストを参考に

させた。英語の表現に制限はなく、自由記述にして実施した。

## 5-2. 調査結果

授受表現確認テストの調査結果は大きく3つに分けて記す。まず誤用傾向の結果を、出題問題の視点から見た結果と、協力者の視点から見た結果の2つに分けて示す。そして最後に日英表現差の結果を記すこととする。

### 5-2-1. 出題問題別正答率と誤用傾向

表3は、各出題問題の正誤数と正誤率をすべて示した出題問題の全体結果である。

〈表3〉 各出題問題における全調査協力者の正誤数と正誤率

問題番号	正答数	誤答数	無答数	正答率 (%)	誤答率 (%)	無答率 (%)
(1)	6	2	1	66.7	22.2	11.1
(2)	6	3	0	66.7	33.3	0.0
(3)	8	1	0	88.9	11.1	0.0
(4)	4	3	2	44.4	33.3	22.2
(5)	6	1	2	66.7	11.1	22.2
(6)	6	2	1	66.7	22.2	11.1
(7)	5	4	0	55.6	44.4	0.0
(8)	6	3	0	66.7	33.3	0.0
(9)	6	3	0	66.7	33.3	0.0
(10)	4	3	2	44.4	33.3	22.2
(11)	7	2	0	77.8	22.2	0.0
(12)	6	3	0	66.7	33.3	0.0
(13)	7	2	0	77.8	22.2	0.0
(14)	6	2	1	66.7	22.2	11.1
(15)	5	3	1	55.6	33.3	11.1
(16)	5	3	1	55.6	33.3	11.1
(17)	7	1	1	77.8	11.1	11.1
(18)	4	3	2	44.4	33.3	22.2
(19)	7	2	0	77.8	22.2	0.0

(20)	3	4	2	33.3	44.4	22.2
(21)	7	2	0	77.8	22.2	0.0
(22)	5	3	1	55.6	33.3	11.1
(23)	5	2	2	55.6	22.2	22.2
(24)	4	3	2	44.4	33.3	22.2
平均	5.6	2.5	0.9	62.5	27.8	9.7

これより、出題問題の視点から見ると、全体として最も正答率が高かった問題が(3)、文章文中の単文の中で使う本動詞「もらう」(以下、「文章文 - 単文 - 本動詞 - もらう」のように記す)の問題で、唯一正答率が80%を超えた問題となった。空欄の模範解答は「おみやげをもらいました」となっている。また、(11) (13) (17) (19) (21) の5問が上記に次いで正答率が高かった。これらの問題の内訳は、「文章文 - 複文 - 本動詞 - あげる」「文章文 - 単文 - 本動詞 - あげる」「文章文 - 複文 - 補助動詞 - くれる」「会話文 - 単文 - 補助動詞 - あげる」「会話文 - 複文 - 本動詞 - もらう」となっている。

一方最も正答率が低かったのが(20)の正答率33.3%で、「文章文 - 単文 - 補助動詞 - くれる」の問題であった。次いで正答率が低かったのが、(4) (10) (18) (24) の4問で、「文章文 - 単文 - 補助動詞 - もらう」「文章文 - 複文 - 補助動詞 - あげる」「文章文 - 複文 - 補助動詞 - もらう」「文章文 - 単文 - 本動詞 - くれる」の問題であった。これらの問題は、いずれも正答率が50%に満たなかった。

〈表4〉 問題形式別の平均正答数と平均正答率

	平均正答数	平均正答率 (%)
会話文	5.8	64.8
文章文	5.4	60.2
単文	5.8	63.9
複文	5.5	61.1
本動詞	5.8	64.8
補助動詞	5.4	60.2
あげる	5.9	65.3



もらう	5.8	63.9
くれる	5.3	58.3

表4は、全24問の問題を「会話文 - 文章文」別、「単文 - 複文」別、「本動詞 - 補助動詞」別、「あげる - もらう - くれる」別に分けて、それぞれの平均正答数と平均正答率を並べたものである。

まず「会話文 - 文章文」別に見る。会話文の問題と文章文の問題各12問を比較すると、平均正答率は会話文の問題のほうが高いことがわかる。差は4.6%であった。出題問題全体結果からもわかるように、最も正答率が高かった問題も最も低かった問題も、いずれも文章文の問題である。しかしながら、文章文の問題は正答率の高い問題と低い問題とに二分されていること、また、正答率の低い問題群が、すべて文章文の問題であったことから、平均正答率が低くなったと考えられる。

「単文 - 複文」別では、単文の問題と複文の問題各12問を比較すると、単文の問題の方がやや平均正答率が高かった。その差は2.8%で、ほとんど差はみられない。出題問題全体結果と併せて見ても、ここにはほとんど誤用の差は見られないことが伺える。

「本動詞 - 補助動詞」別では、本動詞の問題と補助動詞の問題各12問を比較すると、本動詞の問題のほうが正解率が高い。その差は4.6%であった。出題問題全体結果を見ても、正答率の低い問題群のほとんどが補助動詞の問題であり、このことから補助動詞の正答率が低いことがわかる。

最後に「あげる - もらう - くれる」別に見る。「あげる」の問題、「もらう」の問題、「くれる」の問題各8問を比較すると、「あげる」「もらう」「くれる」の順で正答率が高かった。最も正答率の高かった「あげる」と最も低かった「くれる」の差は7%であった。この結果は、問題別結果の中で最も顕著な結果となった。

## 5-2-2. 協力者別正答率と誤用傾向

次の表4は、各調査協力者の正誤数と正誤率を示した、調査協力者別に見た全体結果である。

〈表5〉 各調査協力者における全出題問題の正誤数と正誤率

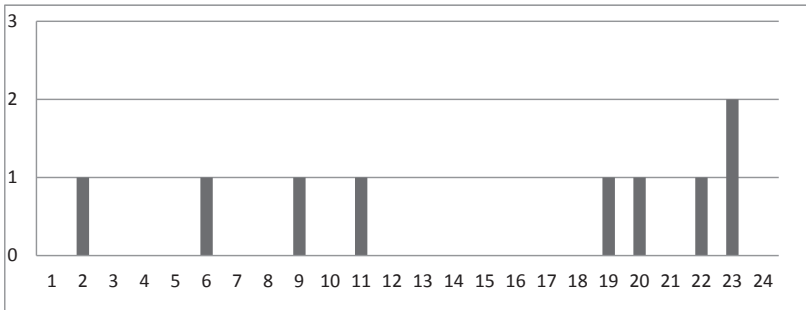
協力者番号	正答数	誤答数	無答数	正答率 (%)	誤答率 (%)	無答率 (%)
1	23	1	0	95.8	4.2	0.0
2	22	2	0	91.7	8.3	0.0
3	2	22	0	8.3	91.7	0.0
4	6	9	9	25.0	37.5	37.5
5	11	13	0	45.8	54.2	0.0
6	9	3	12	37.5	12.5	50.0
7	20	4	0	83.3	16.7	0.0
8	19	5	0	79.2	20.8	0.0
9	23	1	0	95.8	4.2	0.0
平均	15.0	6.7	2.3	62.5	27.8	9.7

表5より9割以上という高い正答率だった調査協力者が3名いた。この3名が誤答した問題は、(1)「会話文 - 複文 - 本動詞 - あげる」が1名、(7)「会話文 - 単文 - 本動詞 - あげる」が2名、(9)「文章文 - 複文 - 本動詞 - もらう」が1名となっている。2問誤答した調査協力者は、(1)と(7)の問題を誤っており、問題形式においては「会話文 - 本動詞 - あげる」の部分で共通している。また、3名とも共通して「本動詞」の問題形式で誤答している。ただし、前項5-2-1. 1)の結果からわかるように、問題(1)(7)(9)は正答率の低い問題群には属しておらず、全調査協力者共通の誤用傾向とは言いがたい。

一方最も正答率の低い調査協力者は8.3%、正答数2問という結果だった。正答した問題は、(3)「文章文 - 単文 - 本動詞 - もらう」と(5)「会話文 - 複文 - 補助動詞 - もらう」で、問題形式において「もらう」の部分が共通している。再び前項5-2-1. 1)の結果と併せて見ると、(3)は最も正答率の高かった問題で、正答率の低い調査協力者でも正答できた問題だということが伺える。

また、おおよそ8割以上正答している調査協力者と、5割を切っている調査協力者とで正答率の差が大きく二分した。それを分かりやすく示したのが図1である。図1は、横軸が正答した問題数、縦軸がその正答者数を示している。正答数11問（正答率45.8%）以下の調査協力者と、正答数19問（正答率

79.2%≒80%)以上の調査協力者とで大きく分かれていることがわかる。



〈図1〉 正答問題数における正答者数の分布

この正答率の高い調査協力者群と低い調査協力者群とで傾向差を分析するため、以下の表5に調査協力者を正答率の高い順に並び替え、それぞれの日本滞在歴・日本語学習歴・日本語学習機関との関係性を比較した。表の罫線の二重線より上が表5で示した正答率の高い調査協力者群、下が正答率の低い調査協力者群となっている。

〈表6〉 調査協力者の正答率順位と日本滞在歴・日本語学習歴・学習機関

順位	協力者番号	正答率 (%)	日本滞在歴	合計学習歴	来日前		来日後	
					学習歴	学習機関	学習歴	学習機関
1	1	95.8	2年半	2年 8か月	1年半 (7か月)	大学	1年 3か月	独学
1	9	95.8	6年	6年 8か月	8か月	大学	6年	独学
2	2	91.7	4年	3年	2年 (半年)	大学	1年	大学
3	7	83.3	6年	11年	6年	大学 日本語学校	5年	日本語 学校
4	8	79.2	1年	7年 1か月	7年	高校 大学	1か月	独学
5	5	45.8	7年	約3年	-	-	約3年	独学

6	6	37.5	2年半	3年	1年	自治体日本語講座	2年	ボランティア講座
7	4	25.0	2年半	5年半	3年	学校	2年半	ボランティア講座
8	3	8.3	1年 2か月	2年半	2年	学校	半年	個別指導 独学

学習歴欄の括弧内は、学習期間中の日本留学期間を示している。ただし、その期間は滞在歴には含まれていない。学習機関欄における「学校」は大学以外の学校であることは確認が取れたが、具体的にどのような学校で学んだのか、それ以上の詳細は得られなかった。調査協力者5については、来日前の学習歴がなく、来日後も学習機関を通さず、主に日常の母語話者との会話の中で学んでいる。

日本滞在歴が長い人はおおむね高い正答率を得ているが、最長の7年滞在者が下位層にいたり、1・2年の滞在でも正答率が高い人もいたりする。また、学習歴においても、学習歴が長い方がほとんどの場合上位層だが、一概には言えない。

この表から上位層と下位層の差が最も顕著にわかるのが、学習機関である。上位層の調査協力者は皆、来日前に高等教育機関にて一定の日本語学習を積んでいることがわかる。また、留学先や高等学校でも日本語を学んできている。一方で、下位層の調査協力者の中には、日本滞在歴が長くても学習機関を通して学んでいない人もいる。日本語学習機関において体系的に日本語を学んでいくことが習得に影響することが伺える。

### 5-2-3. 日英表現差

日英表現差を調査するにあたっては、授受表現確認テストにおいて、正答とみなされた問題の英語記述のみを使用した。誤答問題の英語記述の中には、イラストで示した授受行為と合致していないものも含まれていたためである。また、正答とみなされた問題の中に、英語記述がないものもあった。これにより、有効回答数はのべ133となった。その内、本動詞の有効回答数が70、補助動詞の有効回答数が63であった。同じく「あげる」の有効回答数が47、「もらう」が41、「くれる」が45であった。

〈表7〉 各授受動詞における英語の授受表現使用数と使用率

	回答数	give		get		receive		その他の動詞		
		使用数	使用率	使用数	使用率	使用数	使用率	使用数	使用率	
本動詞	あげる	25	20	80.0	2	8.0	0	0.0	3	12.0
	もらう	27	4	14.8	14	51.9	6	22.2	3	11.1
	くれる	18	15	83.3	2	11.1	0	0.0	1	5.6
補助動詞	あげる	22	3	13.6	0	0.0	0	0.0	19	86.4
	もらう	18	1	5.6	7	38.9	0	0.0	10	55.6
	くれる	23	3	13.0	0	0.0	0	0.0	20	87.0
合計	133	46	34.6	25	18.8	6	4.5	56	42.1	

表7は、それぞれの日本語の授受表現に対して、どのような英語の授受表現が用いられたかを使用数と使用率で示した表である。英語による授受表現は“give”“get”“receive”「その他の動詞」に分類することができた。「その他の動詞」は各問題内容によって使用されている動詞が異なる。

日本語の各授受表現の有効回答数が異なるため、以下からは、主に使用率から使用傾向を見ていく。まず、本動詞と補助動詞とでは、表現の仕方が大きく異なる。本動詞各問題においては比較的“give”“get”“receive”の使用率が高いのに対して、補助動詞の各問題では「その他の動詞」の使用率が約55%～87%となっている。日本語における授受行為の補助動詞による表現は、英語においては多くの場合、“give”“get”“receive”などの授受動詞以外の動詞を用いることがわかる。

比較的“give”“get”“receive”の使用が多い本動詞の場合、「あげる」と「くれる」は8割が“give”で表現され、主語と目的語の入れ換えのみで意味の違いを示している。これは、山田（2004）の見解とほぼ一致した。一方「もらう」は“get”の使用率が最も高く約5割となっているが、“give”“receive”の使用も見られ、唯一使用率が分散している動詞である。また、“receive”の使用は、全体を通じてこの本動詞「もらう」でしか見られず、使用頻度は高くない。

補助動詞の場合も、「その他の動詞」に次いで使用率が高いのが、「あげる」「くれる」では“give”、「もらう」では“get”となっている。ただし、補助動詞「もらう」においては“get 0 to Do”のように、“get”を使役動

詞として用いている表現や使役動詞“let”を用いた“let O Do”の表現が数問見られた。

調査協力者ごとに使用傾向を見ると、本動詞「あげる」「くれる」に対しては一貫して1種類の表現のみ使用している調査協力者が多いが、本動詞「もらう」に関しては、2種類の表現を用いている調査協力者が多く見られた。具体的には、“give”と“get”の2種類、あるいは“get”と“receive”の組み合わせなどである。このことから授受表現の選択や表現方法は、文脈や個人の感覚により異なり、日本語の授受動詞に完全に対応した英語の授受動詞がないことが推察される。

## 6. 意識調査

### 6-1. 意識調査の内容

意識調査では、調査協力者に授受表現に関するアンケートに回答してもらい、それを基にインタビューを行った。指示は英語と日本語で行った。また、アンケートの記入及びインタビューは英語でも可とした。インタビューは調査協力者の許可を得て録音し、文字化している。

アンケートは選択と記述の2種類の質問があり、併せて11問となっている。ただし、回答者の選択によっては回答しなくてもよい問いもある。質問内容は以下の通りである。

- ①授受表現テストの難易度はどうだったか（選択）
- ②一番難しかったのは何番か（記述）
- ③はじめて日本語の授受表現を学んだのはいつか（選択）
- ④「あげる」「もらう」「くれる」をどの順に学習したか（選択）
- ⑤はじめて日本語の授受表現を学んだとき、ほかの文型と比べて難易度はどのように感じたか（選択）
- ⑥ [⑤を受けて] 「あげる」「もらう」「くれる」の中で一番難しかったのはどれか（選択）
- ⑦ [⑥を受けて] どのようなところが難しいと思ったか（記述）
- ⑧日本語の授受表現を習得するためにどのような方法で勉強したか（記述）
- ⑨現在日本語の授受表現の難易度をどのように感じるか（選択）

⑩「あげる」「もらう」「くれる」をそれぞれ英語でどのように表現するか  
(記述)

⑪日本語の授受表現と英語の授受表現の違いは何だと思うか (記述)

この質問への回答を基に、インタビューではアンケートの回答に対する詳しい説明を求めたり、日本語の授受表現に関する感想やエピソード、日英の表現差について考えていることを聞いたりした。

## 6-2. 調査結果

問①、⑤、⑥、⑨は、いずれも日本語の授受表現に関する難易の度合いを問うている。これについて、まず問①の結果は、「簡単だった」と回答した調査協力が者が4名、「難しかった」が5名であった。下の表8では授受表現確認テストの結果と併せて各調査協力の者の回答を示している。授受表現確認テストにおける上位層はおおむね「簡単だった」と回答し、下位層は「難しかった」と回答していることがわかる。これにより、授受表現確認テストの結果と出題された授受表現に関する難易の認識は合致していることが伺える。

〈表8〉 授受表現確認テストの結果と難易度に関する問いの回答

順位	協力者 番号	正答率 (%)	問①	問⑤	問⑥	問⑨
1	1	95.8	難しかった	難しかった	くれる	時々難しい
1	9	95.8	簡単だった	難しかった	全部同じ	時々難しい
2	2	91.7	簡単だった	難しかった	もらう	時々難しい
3	7	83.3	簡単だった	難しかった	もらう	簡単だ
4	8	79.2	簡単だった	難しかった	くれる	難しい
5	5	45.8	難しかった	難しかった	全部同じ	難しい
6	6	37.5	難しかった	難しかった	あげる	-
7	4	25.0	難しかった	難しかった	くれる	難しい
8	3	8.3	難しかった	難しかった	くれる	難しい

次に問⑤と問⑨に焦点を置き、授受表現を学習した当初と現在とでの意識差を見たい。問⑤は調査協力者全員が「難しいと思った」と回答している。それを受けて問うた問⑥の回答では、「くれる」が難しいと感じている人が最も多かった。授受表現確認テストの問題形式別の結果で「くれる」の正答率が最も低かったこととも合致している。

問⑦については、「『くれる』と『もらう』を混同してしまう。」「『くれる』と『あげる』の違いがわからない。」「『くれる』は使ったことがない。使う場面がわからない。」「『もらう』は「～が」と「～に」に誰が入るのかわかりづらい。」「『あげる』は話し手を選択するのが難しい。」などという意見が見られた。特に、「くれる」と「もらう」の混同、「くれる」と「あげる」の混同によって、どちらか一方の授受動詞を難しいと感じている場合が多く見られるようであった。

問⑨については、「簡単だと思う」と回答した調査協力者が1名、「時々難しいと感じる」が3名、「難しいと思う」が4名、無回答が1名だった。各調査協力者の授受表現を学習した当初から現在までの過程が異なるため一概には言えないが、多くの調査協力者が授受表現を学習後も難しいと感じている。表7より、上位層は授受表現確認テストの正答率が高く、問①では「簡単だった」と回答していても、日ごろの使用の際には時々難しいと感じていることもわかる。

インタビューの際、問⑨で「時々難しいと感じる」と回答した3名に具体的にどういったときに難しいと感じるかを尋ねた。それによると、「(授受の)方向だけではなく、自分が(主語と目的語)どちらの立場で話すかも考えて(「あげる」「もらう」「くれる)を選択しなければならなくて、混乱する。」「書くときよりも話すときのほうが難しい。すぐに(言葉が)出てこない。」「(使うべき助詞が)『は』なのか『に』なのか『から』なのか『を』なのかかわからなくなる。」「感謝の気持ちがあったり、丁寧な言い方にしたりする文化が(英語表現には)ないから難しい。」などと回答している。ただし、回答内における括弧書きは筆者による補足である。授受表現確認テストの正答率が高い調査協力者であっても、授受行為の視点と方向によって使用する授受動詞が決定される点や授受表現に敬意や配慮の意味を含む点に苦手意識を感じていることが伺える。

問⑩について、「あげる」は調査協力者9名中8名が“give”と答えており、



多くの調査協力者が一致した考えを持っていることがわかった。しかしながら、「もらう」と「くれる」に関しては意見がわかれ、様々な表現が見られた。詳細を示すと「もらう」では、“give” “get” “receive” “borrow” が挙げられた。一方「くれる」に対応するものには“give” “get” “receive” があげられた。また、インタビューの中で、多くの調査協力者が「同じ英語圏でも、地域や人によって解釈は異なるし、表現も異なる」と発言している。「ただ、英語はほとんどの場合2語の動詞で授受表現ができるから解釈しやすいが、日本語は3語あって難しいから解釈をその人に委ねることが難しい。」と語る調査協力者もいた。

最後に問④については、『「くれる」』という言葉は英語にはない』『「もらう」』という言葉は英語にはない「方向だけでなく、主語や話し手によっても動詞を使い分けなければならないのが英語との違い。」「立場を考えたり、相手に失礼のないような話し方をしたりする文化が（英語圏には）ないから、英語と日本語は表現が違う。」という意見が出された。特に「もらう」あるいは「くれる」に相当する言葉が英語には存在しないことを述べる意見が多く、これらが「もらう」「くれる」への習得の難しさや習得が難しいと感じることに影響していることが伺える。

## 7. 考察

上記の結果を踏まえ、本研究の目的に沿って考察する。

### 7-1. 誤用傾向調査の結果より

誤用傾向調査の結果を次の2点にまとめた。

- ①会話文と文章文、単文中の授受表現と複文の関係節中の授受表現、本動詞と補助動詞、「あげる」と「もらう」と「くれる」の誤用傾向を比較すると、それぞれ文章文、複文の関係節中の授受表現、補助動詞、「くれる」の正答率が低かった。ただし、「くれる」を除いて、その差はあまり大きくない。
- ②調査協力者別に比較すると、正答率が8割以上の調査協力者群と5割以下調査協力者群とに大きく二分され、大学などの高等教育機関で日本語を学習している調査協力者が上位に位置している。

以上のことから、①において「あげる」「もらう」「くれる」の順で正答

率が低くなるという結果は、稲熊（2006）の分析と合致する。坂本・岡田（1996）で、「出題形式の違いが学習者の理解に影響を及ぼす可能性がある。（p. 196）」と述べているが、本誤用傾向調査においては会話文と文章文、単文と複文、本動詞と補助動詞における大きな差異は認められなかった。

先述したように、授受表現における誤用研究はこれまでも数多く行われてきたが、本誤用傾向調査で明らかになった②から、筆者の知見の限りこれまでにない傾向結果が得られた。留学生のみならず、多様なバックグラウンドを持つことの多いALTに調査協力が得られたことが大きかったと推察している。この結果から、同じ英語話者においても、母語の干渉以外における誤用傾向があることがわかる。また、日本語の授受表現は、日本滞在歴や日本語学習歴が長いだけでは習得が難しいことも伺える。制度の整った教育機関において、専門的な知識・技能を有した日本語教員から体系的に学ぶことが、早期習得につながると考える。

## 7-2. 日英表現差調査の結果より

日英表現差調査の結果を、次の2点にまとめた。

- ①日英で授受表現を比較した場合、日本語の授受本動詞はおおむね“give”“get”“receive”で表現され、授受補助動詞はそれ以外の動詞で表される場合が多い。
- ②本動詞「あげる」「くれる」は“give”で表現されることが多いが、本動詞「もらう」に対応する動詞は文脈や個人によって異なる。

以上のことから、授受の方向と話者の立場によって用いる動詞が確定する日本語の授受表現とは異なり、英語の授受表現は、どの動詞を用いてどのように表現するかは、おおむね個人の裁量に委ねられている。したがって、英語には「あげる」「もらう」「くれる」それぞれに完全に合致する授受表現は存在せず、これが、日英の授受表現の大きな差異となっていると考える。また、補助動詞「もらう」に対応する一部の表現を除いて、英語には授受補助動詞的な用法は見られず、この点についても日英間の表現に差が生じる要因となっていることが伺える。

## 7-3. 意識調査の結果より

意識調査の結果を、次の3点にまとめた。

- ①日本語の授受表現は学習した当初のみならず、学習から一定の時間がたっても使用が難しいと感じている調査協力者が多く、授受表現の使用にほとんど誤用のない調査協力者でも、日常での使用に不安を抱えていたりや混乱したりする場合がある。
- ②各授受動詞別に見ると、「くれる」を難しいと考えている調査協力者が最も多く、誤用傾向調査の結果と照らしても、苦手意識が正答率に反映していることがわかる。

以上より、調査協力者の多くは、日本語の授受表現学習時から長い間に渡って授受表現に対する苦手意識や不安を抱えており、その苦手意識や不安が解消されないまま日常で使用していることがわかる。同時にその苦手意識や不安は授受表現使用の正誤にも影響している。インタビューの中で、『『くれる』は使ったことがない。使う場面がわからない。』『授受表現はできるだけ使わない。』『『て形+あげる・もらう・くれる』は使わなくても通じる。』といった意見が出され、苦手意識や不安があるがゆえに使用を避ける、あるいは使用できない傾向にあることもわかった。このように、使用を回避してしまうことが、習得が進まない要因の一つになっていると考える。また、日本語の三つの授受動詞の内、どれか一つの動詞に苦手意識や不安が向きやすいことから、バランスよく使用していくことも念頭に入れるべきである。授受表現確認テストの正答率が高かった調査協力者に勉強方法を尋ねたところ、「友達や同僚などに何度も間違いを訂正してもらった。」と話していた。習得が困難な文型であるからこそ、使用の機会とそれに伴ったフィードバックを積極的に増やしていくことが必要であると考えられる。

## 8. おわりに

これまで、授受表現の誤用傾向と、その要因になると考えられる日英の表現差や授受表現に対する意識状況をまとめてきた。以上の結果とそこから考察されたことを踏まえ、日本語教育の現場において、授受表現学習・指導の際に留意したい点について述べる。

まず、日本語の授受表現においては、自然習得や独学による習得は困難である可能性が高いため、日本語教育機関で専門性を身に付けた教員から学ぶことが望ましい。物の授受に加え、行為の授受や使役表現にも合わせて用い

られる授受表現の使用方法や使用意義を明確に理解するには、自然習得や独学では難しい。調査協力者のバックグラウンドと授受表現のテスト結果を比較してみても、その必要性は明らかである。

次に、英語話者への指導にあたっては、方向性と話者の視点による授受動詞の区別について言及すること、補助動詞として用いる授受表現の使用場面や使用意図について言及することを留意したい。日本語の授受表現は、方向性のみならず、話者の視点も授受動詞の区別に影響することが、英語との決定的な相違である。そして、これによって「英語には『くれる』という言葉はない」「『くれる』と『もらう』を混同してしまう。」などという意見も生じてくる。また、意識調査のインタビューより、補助動詞として用いる授受表現においては、使用場面や使用意図を理解できていない調査協力者もいることがわかり、丁寧に明確な説明が必要であることが伺える。

更に、坂本・岡田(1996)において、『あげる』『くれる』『もらう』の中でも特に『くれる』に十分な時間を割き、『くれる』の習得に力を入れるべきである。(p.197)」と提案されているが、本研究結果からも同様の提案をしたい。本研究においても、「くれる」は誤答が多く見られ、「くれる」と「もらう」、「くれる」と「あげる」の混同が生じやすいという意見があることから、「くれる」の理解及び習得に重点を置く必要があると考える。

そして、習得の度合いに関わらず、ロールプレイングなどを用いて実際の場面に即した使用機会を多く設けるべきである。その際、必ずフィードバックを行うことを留意点として挙げる。本動詞や補助動詞、「あげる」「もらう」「くれる」に片よりなく使用する機会に恵まれること、母語話者がよく使用する自然な使い方を練習すること、習得の度合いや正用誤用の数に関わらず毎回フィードバックを受けることが、日本語学習者の苦手意識・不安を解消することに繋がると考える。苦手意識や不安が解消されることで、授受表現の使用を回避する機会が減り、習得の遅れも軽減されるであろう。日本語の授受表現習得は、日本語学習者にとって大きな壁となることが多く、苦手意識や不安を抱えている日本語学習者も少なくない。今後は、使用における苦手意識や不安の軽減も含めて、習得の手助けをしていく必要があると考える。

今後の課題としてはさらに多くの調査協力者を集め、バックグラウンドごとの誤用傾向調査を充実させたいと考えている。また、今回は使用すべきと

ここで「あげる」「もらう」「くれる」の正しい判断ができていないかを正答の基準としたことから、細かな部分での分析ができなかった。特に、補助動詞としての使用が正しいものであるかの判断ができなかったことが課題として残る。更に、本研究では調査協力者の負担が大きくなった。今回は誤用傾向調査、日英表現差、意識調査を全て関連付けて検証したため意義があったが、今後の研究においては留意していかなければならないと考える。

先にも授受表現習得に関する研究は多く、様々な結果が出ていることから、本研究結果も含め、どれも一概には言えないのが現状である。研究を終えて今後の課題も多く、まだまだ調査する余地のある分野であることから、今後も研究を深めていきたい。

#### 注

※JSLとは、Japanese as a Second Languageのことであり、「第二言語としての日本語教育」すなわち日本で日本語を学ぶ場合を指す。一方JFLとは、Japanese as a Foreign Languageのことであり、「外国語としての日本語教育」すなわち外国で日本語を学ぶ場合を言う。

#### 参考文献

- 荒巻朋子 (2003). 「授受文形成能力と場面判断能力の関係 質問紙調査による授受表現の誤用分析から」『日本語教育』117, 43-52.
- 稲熊美保 (2006). 「日本語教育における授受表現指導の再考—母語および第二言語としての授受表現習得研究概観に基づく妥当性の検証—」『愛知文教大学論行集』9, 37-62.
- 坂本正・岡田久美 (1996). 「日本語授受動詞の習得について」『アカデミア. 文学・語学編』61, 157-202
- 寺村秀夫 (1982). 『日本語のシンタクスと意味 第I巻』くろしお出版
- 萩原彰子 (2007). 「『～てあげる』『～てくれる』『～てもらう』の文法性判断テスト—学習者の日本語学習歴とのかかわりにおいて—」『ICU 日本語教育研究』4, 3-19.
- 山田敏弘 (2004). 『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「て

もらう」の文法―』明治書院

尹喜貞 (2006). 「授受補助動詞の習得に日本語能力、及び学習環境が与える  
影響―韓国人学習者を対象に―」『日本語教育』130, 120-129